

『今月の天候と農作業』

通巻第5689号
7月号
令和6年7月4日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。

【予報のポイント】

向こう1か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため高く、特に期間の前半は、かなり高くなる見込みです。

湿った空気の影響を受けやすい時期があるため、向こう1か月の降水量は平年並か多いでしょう。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	10	80
降水量	九州南部	20	40	40
日照時間	九州南部	30	40	30

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天候は期間の前半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。期間の後半は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。平均気温は、高い確率80%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

<1 週目の予報> 7月6日(土)～ 7月12日(金)

期間の前半は太平洋高気圧に覆われて晴れる日もありますが、後半は湿った空気の影響で雲が広がりやすく、雨の降る日があるでしょう。

<2 週目の予報> 7月13日(土)～ 7月19日(金)

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

<3 週目から 4 週目の予報> 7月20日(土)～ 8月2日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報

(<https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>)を参照してください。

普通作物

◆早期水稻

1 水管理と病害虫防除

収穫直前までの水管理は、間断かん水を基本とし、落水の目安は、収穫5日前です。

カメムシ類の被害防止のため、穂揃い期とその7～10日後の2回防除を徹底しましょう。さらに、発生が多い場合には追加防除を行います。

2 収穫と乾燥調製

収穫適期は全籾の8割が黄化した時期です。収穫後は速やかに乾燥作業へ移し、乾燥は40℃以下で行います。毎年、過乾燥の玄米が多く見られるため適正水分の14.6～15%に仕上げましょう。

◆普通期水稻

1 水管理と病害虫防除

中干しは茎数が20本程度の頃に始め、田面に足跡が軽く付く程度に干します。中干し後は走水を1～2回行い、その後は間断かん水を行きましょう。

また、葉いもちやウンカ類の予察情報に注意し、ほ場をよく観察し適期防除に努めます。

2 追肥

穂肥は「ヒノヒカリ」では幼穂長が1cmの頃が適期です。必ず葉色を確認し、適正な量を施用しましょう。

◆大豆

1 ほ場準備と播種

pH6.0～7.0となるよう苦土石灰で酸度矯正を行い、基肥量は前作を考慮しながら調整します。湿害防止のために、ほ場の周囲には排水溝を設置しましょう。播種は、発芽安定と鳥害軽減のために薬剤を粉衣し、条間60～70cm、株間21cmを目安とします。なお、播種が7月下旬以降になる場合は密植にします。

(福川 泰陽)

果菜類

◆夏秋野菜の高温対策

露地きゅうり、雨よけトマト類、ピーマンなどでは本格的な収穫時期となります。

雨よけ栽培では、梅雨明け後の高温対策が重要になるため、日中にハウスを解放して換気に努めるとともに、寒冷紗などを利用して2～3割程度の遮光を行い、ハウス内の気温をなるべく下げること、果実・葉の温度が上がらないように管理します。

また、循環扇を利用すると、温度上昇が抑えられます。曇雨天後の晴天日は萎れやすくなるため、早朝または前日夕方からかん水を行い、萎れを予防しましょう。

薬剤散布は、高温時に行うと葉焼け等の薬害が発生しやすいため、午前中の早い時間帯か、午後の気温が低下する時間帯に行いましょう。

また、トマト類では、トマトキバガの発生に注意して、摘葉した残渣はほ場外に持ち出し、適正に処分しましょう。

◆いちごの育苗管理

- ① 定植までの日数を逆算し、7月中旬頃には必要数の子苗を確保し、良質苗の生産に努めましょう。採苗後のかん水は、晴天時には早朝に充分に行いますが、日中に乾燥するようであれば、夜間に過湿にならない程度にかん水を追加しましょう。特に、採苗する際に、ランナー先端の子株の不定根が茶色く変色しているときは、親株へのかん水の量や回数が不足していることが考えられるため、かん水方法を見直しましょう。
- ② 病虫害防除では、炭そ病に対する定期的な薬剤散布を行い、発病が疑われる場合には、周辺の株とあわせて直ちに処分しましょう。また、うどんこ病の予防のために、ケイ酸カリを1株あたり2～3g施用しましょう。

(境田 耕作)

葉茎根菜類・いも類

◆かんしょ

生育が不良の場合、地際の茎を確認します。茎が黒～褐色に変色または割れている場合は、基腐病やつる割病に感染している可能性があります。そのような場合は、生育不良の株を袋に入れてほ場の外に持ち出すとともに、周辺の株に殺菌剤を散布しましょう。

排水不良のほ場では、病害拡大の恐れがあるため、排水路の点検・整備をしましょう。また、採種ほ場に入るときは、病原菌を持ち込まないため、農機具や長靴は洗浄したものを使います。

採苗が終わった育苗ほ場は、夏場に残さ分解を促し、土壌消毒をしましょう。

◆さといも

疫病対策として、殺菌剤を定期的に散布しましょう。特に、台風後には治療効果のある殺菌剤を散布しましょう。

石川早生は下旬頃から収穫期となります。収穫が遅れると「水晶芋」が発生し、品質低下につながるため、適期に収穫しましょう。

◆しょうが

上旬頃に追肥の時期となります。10a当たり窒素成分で3～5kgを施用し、土寄せも行いましょう。その後、土壌の流亡防止や地温の上昇抑制のために、敷きわら等をすると効果的です。また、梅雨明け後は、土壌が乾燥しやすいので、かん水をしましょう。

◆秋冬野菜の土づくり

収量・品質向上のためには、夏場の土づくりが重要です。土壌pHの矯正や深耕、堆肥等の有機物の投入、緑肥による土づくりを行いましょう。

(中村 剛)

果樹

Ⅰ 常緑果樹

◆ かんきつ全般

雨天日が多くなり、黒点病の防除が特に重要な時期になります。薬剤散布から合計300mmの降雨があると薬剤の効果がなくなるため、250mm程度の降雨があったら、晴れ間を利用して薬剤散布を行いましょう。

◆温州みかん

7月中旬から収穫前までは仕上げ摘果の時期です。今年は裏年傾向で着果数が平年より少ない傾向にあります。樹ごとのばらつきも多いため、結果量を確認して摘果を実施しましょう。極早生品種の7月10日の果実横径は、38～48mmが理想です。

◆完熟きんかん

開花期のアザミウマ類や灰色かび病の発生は、果実品質を大きく低下させます。開花期の防除を徹底するとともに、枝をゆすって花びらを落としましょう。ビニル被覆を行っている園地では、高温による結果不良が出始めるため、梅雨明け後には早めに天井ビニルを除去しましょう。

◆ マンゴー

炭そ病や軸腐病の発生が多くなる時期です。こまめな収穫や、殺菌剤の散布を徹底しましょう。また、梅雨明け後は強い日射により日焼けが発生しやすくなります。遮光ネットをこまめに開閉しましょう。

収穫後には、剪定作業を行います。7月下旬以降に剪定すると、新梢の充実が不足し、花芽形成が不安定になるため、早めに剪定を行いましょう。また、枝の切り口には殺菌剤を塗布します。

すでに剪定を終え、新梢が発生している早期作型では、葉面散布や新梢の整理、発根促進剤を利用し、新梢の充実促進を図りましょう。

(黒木 宏憲)

花き

◆キク共通

梅雨明け後は、日差しの強い日が続くため、葉焼け等が発生しやすくなります。遮光や換気を積極的に行い葉温を下げるとともに、蒸散量の増加に見合うように適宜かん水します。また、親株床での病虫害防除を徹底しましょう。

◆夏秋ギク

「精の一世」の8月出荷作型では、花芽の分化・発達を促すため、消灯後から11.5時間日長でシェード管理を行います。なお、高温による開花の遅延や奇形花の発生軽減のため、日中の換気に努めるとともに、夜間のシェード開放を行いましょ

う。
「フローラル優香」では、消灯後から2週間程度、12時間日長でシェード管理を行います。なお、高温や消灯の遅れ、多肥は貫生花の発生を助長するため、適正管理に努めましょう。

◆洋花類共通

秋に定植予定のほ場は、土壌分析の結果に基づいた適正施肥を行うとともに、病害や連作障害を回避するため、土壌消毒を行いましょ。なお、太陽熱消毒や土壌還元消毒を行う場合、開始時期が遅れると、十分な消毒効果が得られない恐れがあるため、早めに準備を行いましょ。

◆ホオズキ

8月出荷作型では、上旬からが段階的な摘心と、着色のためのホルモン剤散布の時期です。効果を安定させるため、散布の前後5日間は病虫害防除を控えましょ。また、ホルモン剤散布後の高温は着色不良の原因になるため、涼しい時間帯に行い、散布後数日は必ず寒冷紗で遮光しましょ。

◆キイチゴ

この時期は過度な収穫や土壌の乾燥により樹勢が低下して枯死する恐れがあります。樹勢維持のために太めの枝を数本残し、長期間降雨がない場合はかん水を行いましょ。

(山塚 裕美)

畜産

◆家畜防疫対策

国内における、鳥インフルエンザの発生は4月29日以降、発生は確認されていませんが、豚熱は6月6日に佐賀県で野生イノシシで豚熱の感染が確認されています。

また、アジア圏ではアフリカ豚熱、鳥インフルエンザの発生が引き続き確認されています。

家畜、家禽を守るため、畜舎内外の消毒に加え、農場にウイルスを侵入させないように、人・車両・物資の消毒と野生動物等の侵入防止対策など飼養衛生管理基準に基づく対策を徹底しましょう。

◆家畜

梅雨明け前後は家畜が暑熱ストレスを受ける時期です。畜舎への風通りを良くするとともに、換気扇や細霧装置を稼働させ、暑熱対策を十分に行います。直射日光を遮蔽するための寒冷紗の設置、屋根への石灰塗布、屋根散水などによって畜舎内の温度上昇を防ぐことも有効な暑熱対策となります。夏期は全ての家畜で他の季節より多くの水が必要となるため、いつでも新鮮できれいな水が飲めるよう、水槽やウォーターカップのこまめな清掃と、流量等のチェックを行いましょう。

◆飼料作物

トウモロコシやソルガム等の刈り取りが始まる時期です。例年、ヨトウ類の発生が多くなりますのでほ場を確認し、病害虫の発生を確認したら薬剤散布をしましょう。また、飼料用イネでは雑草が繁茂しやすい時期です。カメムシ等の害虫の密度を下げするための畦畔除草とあわせて、雑草管理を徹底しましょう。

(小田 弥生)

特用作物

◆茶

1 三番茶の摘採

二番茶の摘採から35日程度で三番茶の摘採期となります。この時期は、新葉の硬化が早いため摘み遅れに注意しましょう。また、燃料の価格が高騰しているため、荒茶の価格と経費を考慮し、計画的な摘採に努めましょう。

2 病虫害の防除

新芽生育期に発生が多いチャノキイロアザミウマ、チャノミドリヒメヨコバイ等に注意してください。また、輪斑病に弱い品種では摘採後速やかに防除を行いましょう。

3 更新茶園の整枝

一番茶後に中切りした茶園では、中切り後約60日と8月上旬の2回整枝を行います。また、二番茶後に深刈りした茶園では、8月上旬までに1回整枝を行います。整枝は、いずれも中切りや深刈りの位置から3～5節上げた位置で行います。特に、中切りした茶園では日焼け防止のために、2回に分けて整枝を行いましょう。

4 幼木園の管理

定植当年の露地苗は根域が浅いため、梅雨明け後の干害に注意が必要です。土寄せや敷きワラ等を行い土壤の乾燥を防ぎましょう。

また、1～2年生の幼木園では、台風に備え7月中～下旬に徒長枝の摘芯やせん枝を行いましょう。

(竹田 博文)

◆たばこ

今月は、総かぎ収穫が主な作業となります。

1 総かぎ時の注意点

総かぎは、未熟葉の収穫を避けるため、上位葉(4枚目)の成熟を確認して開始しましょう。成熟の目安としては葉色だけではなく、葉や中骨が左記の状態(①～③)になっているかを確認し、総かぎすることが大切です。

①葉の表面が凹凸になり葉先が枯れる。

②葉全体が下方に巻き葉柄部が下った時(肩を落す)。

③上位葉(4枚目)の中骨が白化して中骨の表面が平らとなり中心にミゾができ、ポ

キッと明音がして折れやすくなる。

着位区分を徹底するとともに過熟の、流れそうな合葉の拾い取りを確実にいき、収量確保に努めましょう。

上葉は、4枚程度を目安に区分収穫し、包内品位を高めましょう。

立枯病様葉は、活力のあるうちにグジリ取りを行い、当日吊込み乾燥しましょう。

2 残幹根の整理

残幹根は、土壌中の病原菌密度の増加につながりますので、収穫終了後、早期に除去し、ほ地外へ持ち出して、耕種的防除に努めましょう。

3 品質管理対策

異物・異臭・貯蔵虫害発生防止のため、作業場の定期的な確認と清掃を行いましょう。

また、出荷までの貯蔵期間が長いので包の吸湿による品質低下を防ぐために、取り下し、荷造り時、貯蔵中の水分管理により一層注意しましょう。

(宮崎県たばこ耕作組合)

◆しいたけ

伏込み地の湿度管理と高温対策を徹底し、健全なほだ木づくりに努めましょう。

1 裸地伏せの場合

笠木は30～40cm程度の厚さとし、雨水が原木に均一に掛かるような掛け方とします。笠木幅は伏せ込みの高さ程度横に張り出し、原木に直射日光が当たらないようにしましょう。また、害菌発生を防ぐため、周囲の刈払いを実施しましょう。

2 林内伏せの場合

直射日光が当たる箇所には、笠木の補充や遮光ネットを設置します。遮光ネットとほだ木の間は20cm程度の空間を確保し、側面の両サイドは裾を広げ通風を図ります。特に湿気が多い場合は、ほだ木の積み替えや天地返しを行うとともに、林縁の草刈りを実施しましょう。

3 人工ほだ場の場合

特に高温・乾燥の害や害菌の侵入を受けやすいため、遮光ネットによる日陰の調整や散水などにより、温度と湿度の細かな管理を行いましょう。

(田畑 美香)

◆農作業安全

今後、蒸し暑い日が続きます。こまめな水分補給と休憩を行い、熱中症を予防しましょう。対策の詳細は、宮崎県農政水産部ホームページホームページひなたMAFINをご覧ください。

(<https://hinatamafin.pref.miyazaki.lg.jp/soshiki/nogyohukyugijutuka/2285.html>)

内容の詳細について

7月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び山村・木材振興課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稲	いもち病(穂)	並	<p>上位葉の葉いもちや穂いもちの発生につながるため、穂ばらみ期後期と穂揃期に防除を行います。さらに、出穂期及びその後も降雨が続く場合、穂いもちの発生拡大が予想される場合は、穂揃期の7～10日後にも追加防除を行います。</p> <p>セジロウンカの発生が多くなっています。一部の飼料用イネ品種で多発生時に吸汁被害が生じる場合があるので、注意が必要です。斑点米カメムシ類の発生が多くなっています。カメムシによる被害は、早期米の等級格下げの重要な要因ですので発生に注意し確実に防除します。穂揃期とその7～10日後の2回防除を徹底します。防除後も残存虫が確認される場合は、さらに3回目の追加防除を行います。</p>
	紋枯病	並	
	セジロウンカ 斑点米カメムシ類※	多 やや多	
普通期水稲	いもち病(葉)	並	<p>いもち病は、本田での初発生に注意し、早期防除に努めます。移植時に箱施薬をしていない水田では、防除が手遅れにならないように注意します。</p> <p>セジロウンカの断続的な飛来が確認されています。海外飛来性害虫の本県への飛来状況については、当センターのホームページ等で随時情報提供していますので確認してください。</p> <p>スクミリンゴガイの生息数が多い場合は、粒剤の水面施薬か捕殺を行います。</p>
	セジロウンカ コブノメイガ スクミリンゴガイ	並 並 並	
野菜・ 工芸作物	アブラムシ類 ハモシトウ タバコガ・オタバコガ	やや少 やや少 多	<p>タバコガ・オタバコガの発生が多くなっています。チョウ目害虫の幼虫は老齢期になると防除効果が不安定になりますので、若齢期を中心に防除を行います。発生状況については、当センターのホームページで随時情報提供していますので確認してください。</p>
施設野菜	黄化えそ病 (MYSV)	—	媒介虫であるミナミキイロアザミウマの生息密度を抑制するため、定期的に防除するとともに、ほ場周辺の除草に努めます。
サトイモ	疫病	—	圃場の見回りをを行い、発生を認めたら直ちに、薬剤が下葉に達するように十分量を散布します。
サツマイモ	基腐病	—	発病株(つるや塊根)は速やかに抜き取り、ほ場や周辺に残さないようにし、定期的に登録のある薬剤で防除します。なお、散布する際は、株元にしっかりと薬液がかかるように注意します。
果樹全般	チャハネカメムシ ツヤカメムシ	— —	果樹カメムシ類の誘殺数が先月に引き続き多くなっています。多飛来を見てからの防除では手遅れとなるので、園内外を見回り早期発見、早期防除に努めます。
カンキツ (露地栽培)	黒点病※ そうか病 かいよう病	やや多 多 並	<p>黒点病、そうか病の発生が多くなっています。感染した枝は主要な伝染源となるため、園外に持ち出し適切に処理してください。</p> <p>黒点病は、降水量が多いほど発生が多くなるので、前回の防除から積算降水量250mmを散布間隔の目安として薬剤散布を行います。</p> <p>ミカンハダニは、生息密度が高くなると防除が困難になるので、1葉当たり虫数0.5～1頭を目安に防除を行います。</p>
	ミカンハダニ チャノキイロアザミウマ	並 並	
茶	炭疽病※ カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャハマキ チャホリガ チャノミドリヒメヨコバイ※ チャノキイロアザミウマ クワシカガラムシ	やや多 少 並 並 やや多 多 やや多 やや少	<p>炭疽病の発生が多くなっています。新芽の生育期に雨が多いと発生が多くなります。二番茶残葉に炭疽病の発生がみられる茶園では、三番茶でも多発する恐れがあるため、三番茶萌芽期～1葉期を重点に防除します。</p> <p>チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマの発生が多くなっています。新芽が加害されると減収や品質低下を招くため、萌芽期から開葉期にかけて薬剤散布を行います。</p> <p>ハマキムシ類、チャノホソガの発生消長については、当センターのホームページで随時情報提供していますので確認してください。</p>

1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。

2) ※は病害虫発生予察情報を発表中もしくは発表予定です。

3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページは、QRコードより閲覧してください。

